

※解答はすべて解答用紙に書くこと。

※字数制限のある問題は句読点や「」も一字として数える。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「自分」とは地図の中の現在位置の矢印程度で、基本的に誰の脳でも備えている機能の一つに過ぎない。とすると、「自己の確立」だの「個性の発揮」だのは、やはりそうたいしたものではない。そう考えたほうが自然な気がしてきます。

もともと日本人は、「自己」とか「個性」をさほど大切なものとは思っていなかったし、今も本当はそんなものを必要としないのではないのでしょうか。

最近、ハーバードのビジネススクールの教授が書いた本を読みました。それにこんなエピソードがあります。「人生で自分自身で決めたいことはなにか」と日米の大学生に書かせてみると、アメリカ人の学生は配られた紙の裏面まで使ってびっしりと書いた。a、日本の大学生は、「住まい」とか「仕事」とか、二三行程度書いておしまいだった。

きつと「自己の確立」や「個性の発揮」を大切だと考える人は、「だから日本の学生はダメなんだ」と言うのでしょうか。

A、そうやって道を切り拓くべきだ、そのためには大学生にはディベートを叩き込め、個性を伸ばせ、そうしないと、これからのグローバル化した社会を生き抜くことはできない」

こうした論調はよく目にします。

でも、日本の大学生にそういう意味での「自己」や「個性」がないのだとすれば、そしてずっと日本人がそういう性質なのだとすれば、それはそういうものを強く求めない文化が日本にあるからだ、と考えたほうがいいのではないだろうか。

①アメリカの文化は、常に周囲がその人に対して「自己」をつくるように求めています。強要してくるというもいい。それが一番端的に表れるのが、

「コーヒーにしますか？ 紅茶にしますか？」

という質問です。いろんなところでそう聞かれるけれども、たいてい私はどっちでもいい。ところが、②どっちでもいいよ、そっちの都合で」と英語で言うのは、意外と面倒なのです。

アメリカは、「あなたはこれか？ あれか？」と選択を迫ってくる文化を持っています。それに常に答え続けるとは、どういうことか。つまり答えるうちに、「自己」「個性」をつくっていかざるをえないのです。

「コーヒーにします」

そう答えた時点で、「自分はこういう時にコーヒーと答える人間だ」という項目が「自分」の構成要素として確立されます。別の時に、

「ビールにしますか？ チキンにしますか？」

と聞かれて、

「チキンです」

と答えれば、「基本的に自分はチキン派だ」という項目が立ちます。

日本はどうか。どこかにお邪魔して座ると、黙ってお茶が出てくる。b、近頃では「お飲

み物は何がよろしいでしょうか？」と聞いてくることもあるでしょうが、聞かれないことが多い。黙って出されて、黙って飲む。そういう人が大半です。

そこで「私はコーヒー派なので、お茶はいりません」とIを張る人は、たいてい嫌がられます。「面倒くさいやつだと思われることでしょう。」

この文化の差は些細に見えるかもしれませんが、かなり根本的な違いです。たまたまアメリカを例にしましたが、ヨーロッパでも同じようなものです。

だから日本人は優れているとか、劣っているとか、そういう話をしたいのではありません。③そういう文化で私たちは育っている、ということですが。これは簡単に意識で変えられるようなものではない。

試みに、先ほどの大学生への課題を自分で考えてみればよいでしょう。「人生で自分自身で決めたいこと」はなにか。A4判の紙で裏までビッシリ書ける人がどれだけいるでしょうか。結構、「それは世間が決めること」で済ますものが多いのではないのでしょうか。くり返しますが、それが正しいとか間違っているとか、そういう話をしていてのではありません。

しかし、生物学的に見ても「自分」などというものは、地図の中の矢印に過ぎない。c、社会的に見ても、日本において「自分」を立てることが、そう重要だとも思えない。このように考えると、戦後、私たち日本人はずいぶん④無駄なことをしてきたのではないか、と思えてしまうのです。

「個性を伸ばせ」「自己を確立せよ」といった教育は、若い人に無理を要求してきただけなのではないでしょうか。身の丈に合わないことを⑤強いているのですから、結果が良くなるはずもありません。

それよりは世間と折り合うことの大切さを教えたほうが、はるかにましではないでしょうか。

養老孟司『「自分」の壁』より

問一 空欄a、b、cに入る言葉を次の中から選び記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使わないこと。

ア そして イ つまり ウ もちろん エ やはり オ 一方で

問二 空欄Aに入る文として最も適当なものを次の中から選び記号で答えなさい。

- ア 自分のは積極的な自分で決めなくてはいけない
イ 自分のは自分の個性に合わせて考えなくてはいけない
ウ 自分のは大学生になる頃には決まっていなければならない
エ 自分のは積極的な他者に任せなければならない

問三 線部①「アメリカの文化」を端的に言い換えているところを十字で抜き出して答えなさい。

問四 線部②「どっちでもいいよ、そっちの都合で」に使われている修辭法を次の中から選
び記号で答えなさい。

ア 暗喩法 イ 直喩法 ウ 倒置法 エ 体言止め

問五 空欄Ⅰに入る言葉を漢字一字で答えなさい。

問六 線部③「そういう文化」とはどのような文化か。次の文の(i)(ii)に入る言葉を
それぞれ九字以下で抜き出して答えなさい。

「(i) (ii) 文化。」

問七 線部④「無駄なこと」を具体的に書いてある部分を二十字以上、二十五字以下で抜き
出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

問八 線部⑤の「強い」は「強い」という言葉です。これと意味が最も近い言葉を、本文
中から二字で抜き出し、解答欄をうる形で答えなさい。

問九 本文には次の一文が抜けている。この文が入るすぐ後の文の最初の五字を抜き出して答え
なさい。

「このエピソードをどう考えるべきか。」

問十 部『世間と折り合うこと』とあるが、あなたが他者と折り合いをつけていること(ま
たは過去につけていたこと)を四十字以上六十字以下で、何をどのように折り合いにつけ
ているのかわかるように具体的に書きなさい。

二 線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

① たき火の後シマツをする。

② カイトウ乱麻を断つ。

③ イサみ足で失敗した。

④ 人事をつくしてテンメイを待つ。

⑤ いわしの頭もシンジンから。

⑥ 一日センシユウの思いで待つ。

⑦ カップにお湯を注ぐ。

⑧ 大枚をはたいて買う。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

その日は、久し振りに空が曇っていた。岩助は山へはいって行く坂道で、小便を放りながら
考えた。佐々山も野呂山も掻きつくした、窪山は人が集まり過ぎる、今日は山は少し険しくまた
遠くもあるが、山椒谷の方までのぼって見よう。案外早く荷がでるかもしれない。

① 岩助の考えは的中した。山椒谷には、茨やつつじが密生して掻きにくくはあったが、太く
て長い松葉が相当に落ちていた。ときどき四十雀が梢から梢へ移りかわるほか、誰の姿も見
当たらなかった。彼はひとりで、つぶらな瞳と赤い頬のセイを思いながらせつせと仕事にとり
かかった。

やつと掻き集めた松葉を籠に詰めていると、急に谷が暗くなって頂の方からしめりを帯びた
風が笹の葉を騒がせながら吹き降りて来た。風が過ぎ去ったかと思う間もなく、大粒の雨がぱ
らぱらと落ちてきた。岩助はあわてて近くの榎の木の下に雨宿りした。

その時、とと、とと、という音が彼の耳に聞こえて来た。ふり向いて見ると、谷の上手から下
りて来る類冠りをして竹籠を背負った小さな姿が目についた。誰だろう。分からない。しかし、
山人には山人の親しさがある。彼は声を出して呼んで見た。

「オーイ」

② 姿がこちらをふり向いた。やはり誰か分からない。が、姿は雨に濡れている。彼は手首をう
ごかしてさし招いた。姿は小走りに近づいて来た。そして榎の木の三、四間前できよとんと立
ち止まった。

「ら、まあ……」

岩助は瞬間はつとした。ものが言えなかった。が、すぐ③にわか雨が口をほどかせた。
「早う……早う入らんとびしょ濡れになるがな」

きよとんとした顔が、雨の中のにこりとした。

「じゃ、入れてえな」

姿は岩助から少し離れて、榎の木の下に駆け込んだ。駆け込むが早い地べたの上に膝をつ
いて、背中の籠をおろして置いた。

十秒。二十秒。三十秒。

岩助の胸が、えたいの知れぬ動悸をうちはじめた。彼は狐にでも騙されているのではないか
といふかった。が、姿は類冠りをとって、その浅黄木綿で濡れた顔を拭いながら、

「④ 私な、きくちゃんかと、思うた」

と喘ぎながら言った。そうしていつもの癖とおなじに、肩を大きくすぼめて笑った。やはり
現実のセイであつた。

あまりの咄嗟に岩助は少しどぎまぎした。が、やつと、

「そうかな。わしは……だいぶん濡れたじやろうな」

と半分意味の通じない返事をした。すると彼女は、

「いいや、ちつとも……これ」

と、くるりと彼の方に背中を向けた。彼女の胴体よりも大きい竹籠の荷は、身体の防水具をな
したのであろう、ほんの少ししか濡れていない半幅帯の結び目が、背中に突き出された。

一分。二分。三分。

セイの息づかいがだんだん落ちて来ようであつた。と同時に、岩助の動悸も次第に静ま
っていった。

前の松林の間を、綾をなしながら駆けていく白い雨足を、二人は黙って見つめていた。が、
岩助が口を開いた。

「ひとりで来たん？」

A 「……」 彼女の頭が縦にうごいた。

「いつもこつちへ撫でに来るん？」

B 「……」 今度ははるく横にうごいた。

「今日がはじめて？」

C 「……」 今度は縦にうごいた。

「二人で来ても恐うなえか？」

D 「……」 今度は大きく横にかぶりを振った。

岩助はいつかの毬投げ事件の時のことが頭の中にうかんできた。あの時とそっくり同じ顔だ、と彼は思った。⑤ 困ったような表情が、彼女の長い睫のあたりで揺れていた。

彼は最近、セイを夢にさえ見るようになっていた。それはきまって彼女が盛装して、晴れた空の万国旗の下で運動会をしている姿であった。彼女はいつもと澄ました瞳を真正面に向け、胸を張って、顎を引き締め、その長い手と足を前後左右に動かした。その彼女が、今、彼と咫尺を隔てて佇んでいるのである。身体の中をこれまでの淡い恋心をのりこえた青い毛虫のような生きものが、むずむずとはげしく蠢くのを彼は感じた。その時また急にざああと風が吹き過ぎる音がして、雨の雫が櫛の梢をとおしてぽとぽと落ちてきた。

「あ、雨が落ちやがる。——セイちゃん、もっとこっちへ寄らんと」

セイは櫛を仰ぎながら、彼のもたれてる幹の方へ一足近づいた。

「まだ濡れるがな。もっと寄らんと——」

「……」

彼女は更に少し近づいた。

「まだ。もっと」

「……」

彼女の身体が、岩助の身体にかすかに触れた時、彼の両手は既にセイの肩にかかっていた。

「いたた……」

彼女が小さく叫んだ。

「う？」

彼は両手を少しゆるめて引いた。

「私な、あれからずっと、さわるところが痛いん」

彼女はいつか毬のあたった左の胸の上を抑えた。

「……」

しかし岩助は、彼女のそうした言葉に憐憫をあたる間隙を今は持たなかった。次の瞬間、セイは櫛の幹と岩助の胸に挟まれたまま、細面の顔の上に、二つの長い睫を軽く閉じてふるえていた。

にわか雨が遠く過ぎ去って、赤松の幹の片側に夕陽がしずかに映えていた。雑木や熊笹の葉の露が、微風に光ってこぼれていた。

岩助は、まだうけとりの済んでいないセイの竹籠に、自分の松葉を分けて与えていた。

「明日もな」

A 「ん」

「この辺でな」

B 「ん」

「きつとな」

C 「ん」

にわかづくりの荷ができると、セイは急いで竹籠を背負って、ころぶように里を指して駆け下りた。彼はまたしても、夢ではないかと⑥ いぶかりながら、その後姿を呆然と見送った。

岩助の生活が急変した。あれほど気持ちの負担になっていた山行きが、この上もない歓喜に変わってきた。彼は毎日学校の授業が終わると飛ぶように校門をすべり出た。

「お前、今日のうけとりは山行きじやろ。なら、一緒にいこうや」

と道連れになった近所の達吉に誘われたことがある。

「うん、じゃが……まだ、家へいって見んと、よう分かんじや」

彼はこう返事を濁らして、達吉を欺いた。

彼はただひとり山へ登って行くのであった。谷に辿りつくともまず四方を見廻して、セイの所在をたしかめる。もし彼女が来ていればほっと安心し、来ていなければ心まちに待ちながら、その日の仕事にとりかかる。

彼はたのしかった。実に神様も及ばない早業で、さつさと松葉を掻きよせるのであった。

やがて二つの小さい影は、すうっと寄り添って、物かげを掴んで消えていく。——あるときは谷の岩の間に、ある時は太い櫛の木の下に、またある時は犬歯染の長い葉かげに。

二人は菜菔の渋い実を噛んだり、空豆を食べたりしながら、あたりが薄暗くなってしまうまで、時のたつのを忘れていた。その上をよく、鳥がかあかと鳴きながら通った。

(木山捷平「うけとり」)

問一——線部①「岩助の考えは的中した」について、ここでの彼の考えの内容を本文中から抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

問二——線部②「姿」とは誰のことですか、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 山人 イ きく ウ セイ エ 岩助 オ 達吉

問三——線部③「にわか雨が口をほどかせた」の意味を変えないで、「にわか雨」「口」「ほどけた」という語を用いて、十二字以下で言い換えなさい。

問四——線部④「私な、きくちゃんかと、思うた」について、「私」に「きくちゃん」かと思われたのは誰ですか、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 山人 イ きく ウ セイ エ 岩助 オ 達吉

問五——線部⑤「困ったような」の「ような」と同じ使い方(意味)のものを次の中から選び記号で答えなさい。

ア 彼女は花のような笑顔で振り返った。

イ 寒いときは冷えないような工夫をしよう。

ウ こちらに近づいてくるような物音が聞こえる。

エ 東京、大阪のような大都会に共通した問題。

問六——線部⑥「いぶかり」のここでの意味としてもっともふさわしいものを次の中から選び記号で答えなさい。

ア 腹を立て イ 残念に思い ウ 不信感を持ち エ あやしいと思い

問七——《I》について、AからDの彼女の返答からわかることを、三十字以内でまとめて一文で答えなさい。

「……」

問八 《Ⅱ》について、ここでのAからCの「ん」はどういう気持ちであらわしたのですか。

もつともふさわしいものを次の中から選び記号で答えなさい。

ア 失望 イ 共感 ウ 反感 エ 同意 オ 嫌悪^{けんお}

問九 岩助の生活は山のできごとによって大きく変わることになりますが、どのように変わりましたか、漢字二字の熟語を本文(《Ⅰ》よりもあとの部分)から抜き出して答えなさい。

四 次の遊びの中から、あなたがこれまでにしたことがある(または見たことがある)ものをつ選び、その遊びを知らない人に説明するつもりで、その遊びのルールを二百字以下で書きなさい。

※選択した遊びの記号を必ず明記すること

※一般的ルールに限らず、あなたの地域のルールで構いません

ア ばば抜き(トランプ) イ 七並べ(トランプ) ウ ドッチボール
エ 伍けり オ だろぼう巡査(だろけい けいどろ だろ巡)

成績

文化。

み

2

[illegible]